様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年　12 月 24 日現在

機関番号：32702
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：22520036
研究課題名（和文）　一遍の神仏関係思想における倫理学的原理に関する研究

研究課題名（英文）　Study on the ethical principle in thought of Ippen about the relationship between "Kami" and "Buddha"

研究代表者
上原　雅文（UEHARA MASAFUMI）
神奈川大学・外国語学部・教授
研究者番号：30330723

研究成果の概要（和文）：『一遍聖絵』に記述された神仏関係について研究し、一遍が、当時の本地垂迹思想とは異なり、自然神や死霊などの「実類神」のうちにも「垂迹神」を見いだしていたことを明らかにした。また、踊念仏のための建物は「踊り屋」ではなく「道場」と呼ばれていたことを明らかにした。さらに、道場で行われる踊念仏が、世俗世界と浄土とが平等であるという存在論的平等性と、浄土と世俗世界とが隔絶されているという存在的隔絶性とを止揚した、存在的平等性の限定的現実化としての意味を持つことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：I studied about the relationship between 'Kami' and 'Buddha' described in 'The Ippen hijiri-e' (Illustrated Record of St. Ippen). In the period of Ippen main group of buddhists thought that some of Japanese Kamis were manifestation of buddha. Those were called Suijaku-shin, and they could be respected because they were originally buddha. And they did not respect Jitsurui-shin, such as the spirits of nature and dead people. But Ippen thought some of Jitsurui-shin could be Suijaku-shin, I clarified that point by reading 'The Ippen hijiri-e' carefully. And I also clarified that shacks for 'Odori-nenbutsu' were called 'Dojo' not called 'Odori-ya'.And I also clarified that the meaning of 'Odori-nenbutsu' is limited realization of existential equality that was sublate the existential isolation and the ontological equality.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学
キーワード：一遍、神仏、踊念仏、本地垂迹説

１．研究開始当初の背景

日本思想史を題材にした倫理学研究は、いまだに神道、仏教、儒教などの分野に限定された形で行われており、神・仏・天といった超越観念が関係する深層構造を捉え返す研究はほとんどなされてこなかった。本研究に関連する神仏関係思想については、主に歴史学（仏教史）において研究されてきた。辻善之助の「本地垂迹の起源について」（1907）

に始まる研究は、堀一郎、田村圓澄、高取正男らの批判的研究に受け継がれ、現在は中村生雄、山本ひろ子、末木文美士らによる宗教思想史的研究が進展をみせている。また日本思想史では佐藤弘夫が成果を上げている。しかし、これらの研究はあくまでも歴史学的研究であり、倫理学的な観点からの研究ではない。

倫理学的な研究では、和辻哲郎が、日本の神の原理を「神聖なる無」と捉え、それを仏教的原理である「絶対空」と重ねるという独自の“神仏習合”理論に基づく「絶対者（絶対的否定性）」概念を提示し、「絶対的否定性が否定を通じて自己に還る運動」という「倫理学の根本原理」（「人間存在の理法」）を提唱したことを嚆矢とする（『倫理学』）。さまざまな批判はあるにせよ、伝統的な神・仏観念を統一的な原理として理論化し、西洋倫理学の原理との比較・関係づけも行った功績は大きい。和辻の高弟である湯浅泰雄は、深層心理学理論を援用して神仏習合思想を研究したが、しかし倫理学的原理の探究とは言い難い。その他、従来までの研究では、和辻倫理学に対する批判ばかりが目立ち、和辻が目指した原理的研究が継承されていないのである。近年、佐藤正英は存在者と意識が関係する諸様態として、神・仏法・天のそれぞれの概念を原理的に考察する視点を提唱した（『日本倫理思想史』2003）。佐藤の研究が、唯一、和辻を真に批判しその意志を継承する研究であると言えるだろう。本研究は佐藤正英の研究と連動する。

本研究が対象とする一遍は、神信仰を重視した点で、浄土教史の中でも特異な思想的位置にある。法然や証空という一遍に連なる祖師達は神信仰に否定的であった。しかし一遍は、全国を遊行する中で寺院と並ぶ数（10社以上）の神社に参詣し、いくつかの神社で神と交流したという説話を残しているのである。当時、本地垂迹説が一般的であったにせよ、浄土思想の目的は浄土への往生であり、穢土であるこの世界の神々に積極的にかかわる理由はない。名号（称名）の絶対性を説き、往生の理論を確立した一遍であればこそ、神への積極的な関わりは大きな謎の一つなのである。この謎について、仏教史研究においては、「信・不信を選ばず、浄・不浄を嫌はず」という熊野神託の言葉が、救済における条件論としてわずかに考察されているのみである。倫理学・倫理思想史研究においても注目されておらず、佐藤の『日本倫理思想史』でも一遍の神仏関係思想についての考察はない。倫理学研究の対象として主に取りあげられる鎌倉仏教の祖師達（法然・親鸞・道元）と並んで一遍もその独創性と後世に与えた影響の大きさは無視できない。それにも関わらず一遍の評価は低い。それは、一遍のみが神との関わりを積極的に持った“曖昧な”仏教思想家であると見なされていることに一因がある。つまり、神仏関係思想を倫理学的な原理として考察する視点の不在が、端的に、一遍の評価の低さにあらわれているのである。一遍思想の解明は倫理学研究において極めて重要な意義をもつと言わざるを得ない。

研究代表者・上原は、平成 15～17 年度に「日本における神仏関係思想をめぐる倫理学的基礎研究―神・仏概念の原理的解明―」という課題で、また平成 18 年度～平成 20 年度に「山王神道における神仏関係思想の原理に関する倫理学的基礎研究」という課題で科学研究費補助金の交付を受け、一貫して神・仏概念の解明と神仏関係思想の根底にある倫理学的原理の解明の研究を継続してきた。本研究は、その発展的な展開として位置付く。

本研究開始当初までの研究成果を端的にまとめるならば、神に関しては、神は「存在の生成的威力」であり、人はそれを感覚や情念などの〈感性〉で受容し圧倒されるが、祭祀という〈知〉の同一性作用によって存在との融和を果たすという原理的過程が明らかになった。仏に関しては、仏法は「存在の真実相」であり、人は自己中心的な感覚や情念などの〈感性〉（煩悩）を克服し、真実相を〈知〉（絶対知）で捉え尽くすことによって存在との融和を果たすという原理的過程が明らかになった。神仏習合思想においては、克服されるべき〈感性〉が比喩的・象徴的な〈知〉を媒介として絶対知の体得に援用され、同時に〈感性〉も変容・浄化し、真実相の受容に開かれるという、〈知〉と〈感性〉との、緊張関係にありながらも相互に関係し合う原を明らかにしつつあった。

以上の研究の中で、一遍思想の重要性が見えてきたのである。一遍は、多くの神社に参詣し、その聖地の中で神と関係しただけではなく、「踊り念仏」の活用や称名における「声」の重視など、聖地景観の全身的な感覚的受容、踊るという身体表現、発声といった〈感性〉的な活動を仏教思想の中に積極的に意味づけているのである。神仏関係思想を〈知〉と〈感性〉との相互関係として研究してきたことを発展させる上で、一遍思想の研究が極めて有益であると考えられた。また、一遍の没後 10 年に作成された、聖戒の『一遍聖絵』は、当時の寺院・神社などの聖地景観や踊り念仏の場面などを克明に描いた貴重な資料であり、一遍思想を表現しようとした聖戒の作成意図に「絵画」という〈感性〉的表現が不可欠のものとして位置づけられていたと考えられる。この貴重な資料である『一遍聖絵』が現存することも、本研究を進める上で有益であると考えたのである。

２．研究の目的

本研究の目的は、一遍における神仏関係思想を倫理学的原理として考察し、従来の研究とは逆に、一遍思想の独創性と倫理学的な意義とが、神と関わることと密接な関係があることを解明することにある。具体的には、一遍の神仏関係思想を〈知〉と〈感性〉との相互作用という観点から原理的に解明する。

さらに、鎌倉仏教の祖師達の思想と比較考察し、仏教研究のあり方をも捉え直す視点を提示したい。従来、日本仏教は、仏教民俗学と仏教哲学とに分かれて研究されている。それは、神仏関係の原理が解明されていないことに対応する。一遍思想の解明は、その現状を打破する革新的な視点をもたらし、倫理思想としての仏教の再考に繋がると考えられる。またそれは同時に、親鸞や道元などの主知主義的な仏教研究を根底から捉え直す視点ともなるのである。

以上の目的を達成するために、研究開始当初、３年間で次のような具体的諸点の解明を予定していた。

（１）『一遍聖絵』『一遍上人語録』『播州法語集』『一遍念仏法語』など、後世の思想が混在しているテクストを読み解き、一遍の法語を確定し、その思想の独創的部分を鮮明化する。

（２）『一遍聖絵』に詳細に描かれた熊野、厳島などの諸神社の景観、およびそこでの神と一遍との関係を詳細に読み解き、一遍思想における神信仰の積極的な意義を解明する。

（３）『一遍聖絵』に描かれた神社を実地調査し、絵画表現と比較考察する。神仏が共存する景観の構造を解明し、仏教的な〈知〉と景観受容的〈感性〉との関係を解明する。

（４）「名号」の意味を「声（音）」という〈感性〉の役割という観点から、また「踊り念仏」における「踊り」の意味を、踊りによってもたらされる情念や身体的運動という〈感性〉の役割という観点から原理的に解明する。現存する「踊り念仏」の実地調査も行う。

３．研究の方法

神仏関係思想における倫理学的原理の解明を視野に入れて、一遍の思想研究を行う。具体的には、諸文献の蒐集・読解、絵画資料の分析、現地調査を並行して実施する。

文献蒐集と読解は、一遍・時宗関係資料のみならず同時代の仏教および神道思想文献をも対象とし、文字文献から一遍思想の特徴を解明する。特に、一遍における「名号」の意味を、特に「声（音）」という〈感性〉の役割という観点から、浄土思想史の中に位置づける。源信、法然、証空を経て、一遍がなぜ「一遍」の（称名）念仏に集約していったのかが、読解を通じて解明すべき教学的な問題である。

また、一遍の念仏における「踊り」の意味を、一遍の法語読解や『一遍聖絵』の絵画分析から研究する。その際、神道思想における「舞」「踊り」などとの関係にも留意する。空也の「踊り」についての思想との異同についても研究する。さらに踊念仏が歌舞伎踊りや盆踊りへと変化していった過程も研究する。

絵画分析は、『一遍聖絵』のみならず、『遊行上人縁起絵』や同時代の祖師絵巻なども対象とし、『一遍聖絵』の表現上の特殊性を解明するとともに、描かれた聖地や踊りの場面の分析を、ＰＣを活用して行う。具体的には、『一遍聖絵』に絵画として描かれた寺社の景観をトレースし、人物の配置、寺社の建造物、海山の景観、川などの要素の関係をパターン化し、データベース化する。構図などを指示した作者聖戒における仏教的な〈知〉と景観受容的〈感性〉との関係について考察し、絵画でしか表現できない思想内容を確定する。

現地調査は、一遍が訪ねた各地の寺社、および現存する「踊り念仏」を調査対象とし、映像資料としてデータベース化するとともに、『一遍聖絵』に描かれた景観・踊りとの比較研究を行う。

調査候補としている踊念仏は、７月に行われている、神奈川県藤沢市遊行寺（清浄光寺）の踊り念仏、および 11 月に行われている、山形県天童市仏向寺に伝わる踊り念仏（踊躍念仏）である。主催する住職や踊り手へのインタビューも含めて、写真や動画で記録し、踊りによってもたらされる情念や身体的運動という〈感性〉の役割を考察する。

一遍が訪ねた各地の寺社の調査候補地は、広島県厳島神社・吉備津神社、愛媛県大山祇神社、兵庫県大国魂神社、愛媛県岩屋寺、大宝寺、京都府石清水八幡宮、静岡県三嶋大社、和歌山県熊野本宮・速玉・那智の各大社である。

４．研究成果

（１）神仏関係思想の研究：

2010 年度には、古代中世の神道・仏教文献を中心に幅広く資料を蒐集し、絵画資料も含めて読解を進め、一遍思想の独創的部分を鮮明化すべくつとめた。

2010～11 年度に、『一遍聖絵』に描かれた神々の記述を読み解き、一遍の神仏関係思想の一端を論じた「『一遍聖絵』に描かれた一遍と神々―「仏法を求める垂迹神」をめぐって」を公刊した（2012 年）。本論文は、当時一般的であった神仏関係思想（本地垂迹説）

に対する、一遍の神仏関係思想の独自性を闡明したものである。

その論文において明らかにしたことは以下の諸点である。一遍が諸国をめぐる中で関係した神々は、一遍との関係に基づいて〈教示する垂迹神〉〈往生を助ける神〉〈仏法を求める神〉の 3 つに分類される。〈教示する垂迹神〉とは、熊野および大隅正八幡・石清水八幡の神々であり、一遍に何らかの教えを示す、本地が阿弥陀仏とされる典型的な垂迹神である。〈往生を助ける神〉とは、神に対して自らの往生を祈るべきとされた神々であり、伊予国三島、淡路国二宮などがある。これらも垂迹神であると考えられる。〈仏法を求める神〉とは、一遍に結縁を求める神々であり、一遍の説法の聴聞を求めたり、一遍への供養を求めたりする。当時一般的であった本地垂迹説は、神々を「権化神（権現）」と「実類神」に分類し、前者を「垂迹神」として信仰すべきであり、後者は自然神や死霊などであって崇敬すべきではないとしていた。その理論からすれば、〈仏法を求める神〉は原則的に「実類神」に分類されるはずである。しかし一遍は、蛇体として現れたり、贄を食べたりする「実類神」たる〈もの〉神を垂迹神と見なし、積極的に関係を持とうとする。一遍とそれらの神々との関係の記述から、本地が仏である垂迹神が〈もの〉神として顕現し（あるいは〈もの〉神として垂迹し）、一遍の説法や儀礼によって仏へと回帰的に向かう、という在りようが見られる。それは『一遍聖絵』に描かれた一遍の神仏関係思想の一端であろう。ここに、当時の本地垂迹説との決定的な違いを見ることが出来る。

この一遍の神仏関係思想には、仏法的な〈知〉と現実世界の景物をとらえる〈感性〉とを重ねる志向、あるいは〈知〉と〈感性〉との相互作用が見られる。それはまた、念仏によって現実世界（「衆生界」）と浄土（「弥陀国」）とが称名（「一念」）によって重なるとする「十一不二」の思想とも関連すると思われる。

2012 年度には、一遍の神仏関係思想と名号思想との原理的な関係について考察を深めた。

「十一不二」の思想では、浄土と世俗世界との存在論的「平等」性を説いていた。いわゆる熊野成道後も、その存在論に変化は無いと思われる。熊野成道では、存在的に隔絶している浄土と世俗世界とが、阿弥陀仏の他力（救済力）と「一遍（一回）」の称名によって埋まり、人々は信不信に関係なく浄土へと往生できるとする思想を確立したと考えられる（称名絶対主義）。それは浄土経典の論理的帰結ともいえる思想である。しかしそれはあくまでも理論的（〈知〉的）な完成に過ぎなかったと考えられる。一遍は、念仏札を配りつつ各地を遊行し、絶えず修行を続ける。その中で踊念仏に出会い、さらにはそれを時衆の修行様式とする。時衆には厳しい修行と信心を求めているのである。ここには、存在論的平等性および往生可能性についての〈知〉的確信と、存在的隔絶性を今ここで埋めようとする〈感性〉的営為という二重性が分裂したまま存在しているように見える。しかし、踊念仏は、称名という営為に土俗的な神信仰的儀礼および死霊への儀礼を援用することによって新たに意味づけられた〈感性〉的営為である。つまり、踊念仏に見られるのは、〈知〉と〈感性〉との止揚としての実践的念仏思想であり、踊念仏を修することは、いわば存在論的平等性を「生きる」ことなのである。

（２）踊念仏の研究：

踊念仏が追善供養・慰霊鎮魂の意味を持つ法会であることはすでに明らかにされているが、2010 年度～11 年度には、さらに、厳しい修行（「行道」）として意味づけられていることを明らかにした。また、踊るための臨時の建物を「踊り屋」と呼んでいる通説の誤りを指摘し、本来は「道場」と呼ばれていたのでではないかということを明らかにした。この点も、論文（「『一遍聖絵』に描かれた一遍と神々―「仏法を求める垂迹神」をめぐって」）であわせて論じた。

2012 年度には、天台宗のうちにあった「行道」と踊念仏との関係を考察した。また踊念仏を、空也との関係のみならず、当時一般的であった「融通念仏」および土俗的な父母供養の念仏（追善供養・慰霊鎮魂）との関係で捉え直し、その背後にある土俗的シャーマニズムとの関係をも考慮することによって、原理的な考察を深めた。そして、シャーマニズムに見られる没我性が、「無念」という念仏における理想的心的状態と関連を持ち、一遍の「感性」的営為としての実践的念仏思想の確立に繋がったことを明らかにした。

（３）『一遍聖絵』の絵画の研究：

2010 年度～11 年度にかけて、絵画のデータベース化を試みたが、部分的なものにとどまった。絵画部分の考察としては、特に神社の景観表現について、現在の地形図や景観と照らし合わせることによって、表現の特徴を特定しようとしたが、まだ十分に明らかになってはいない。

2012 年度には、詞書に記述のない絵画部分を取りあげて考察した。聖戒が同行したかどうか不明な箇所もあるが、聖戒が同行せず、伝聞した部分に関する箇所において、土俗的な儀礼や景物が描かれているのではないかという仮説を抱いた。特に、墓地、海、山岳などの景観が重要な意味を持っていること

を明らかにした。今後、絵画の研究を進める上で、聖戒自身と一遍（とその同行者・時衆）とを区別し、その関係を考察すべきである。

（４）実地調査：

2011 年度に、石清水八幡宮とその周辺の調査を行った。絵画では「よどのうえの」での踊り念仏が描かれているが、その地（3 つの川の合流地点）の景観的意味を石清水八幡宮との関係で考察した。

上記（１）～（３）の内容を発展させた研究成果を、2013 年 8 月の研究会（「平成 25 年度 科研費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究会　神奈川大学　8 月 25 日」）において発表した。その内容は以下の通りである（6 月の報告書において発表を見合わせた内容）。

上記（１）で述べたように、踊念仏は存在的隔絶性を埋める修行であり、存在論的平等性を「生きる」ことである。踊る念仏者に要請されるのは、厳しい苦行であるが、その厳しさは隔絶をもたらしている世俗的（煩悩的）生の「死」を目指すことに由来する。その苦行を経てはじめて、念仏者は忘我状態の踊念仏において菩薩となる、あるいは菩薩と一体することが可能となる。これを「限定的菩薩化」と呼ぼう。

限定的菩薩化は存在論的平等性を「生きる」形として、念仏者に救済をより確信させる役割を持つ。しかしそれと同時に踊念仏は、それを人々に見せることによって、この世俗世界の衆生を救済し続ける働きをもつ。

踊念仏の場所は結界化された空間として描かれている。ここには密教的結界もしくは神道的祭場の影響が見られるが、いずれにせよ神霊的存在を招き一体化する限定的儀礼空間としての意味を持つ。即ち、踊念仏の念仏者は、神や霊魂の依り代となり、神や霊魂とともに菩薩化すると言えるのではないか。菩薩化した念仏者を見る人々にとっては、その道場は来迎の空間となる。音楽とともに来迎する仏菩薩を人々は幻視する。

つまり踊念仏は、踊る念仏者の限定的菩薩化を媒介に、神・霊魂・人々という世俗世界の衆生が一体となって今ここに浄土を現出させる行なのである。原理的には、道場を中心に現出した浄土は、存在論的平等性と存在的隔絶性の矛盾を止揚した「存在的平等性の限定的現実化」としての意味を持つと言える。

しかし、その浄土は時空的に限定されている。その限定性が、一遍を遊行へと駆り立てる。原理的には、限定性（時空的一回性）は遊行性（時間的反復性と空間的拡張性）を必然化すると言える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①上原　雅文、『一遍聖絵』に描かれた一遍と神々―仏法を求める垂迹神、寺社と民衆、査読無、第八、2012、pp.7-21

６．研究組織

(1)研究代表者

上原　雅文（UEHARA MASAFUMI）
神奈川大学・外国語学部・教授
研究者番号：30330723